

《わがまちのお宝 大村市》

大村市の観光と物産

大村市観光振興課

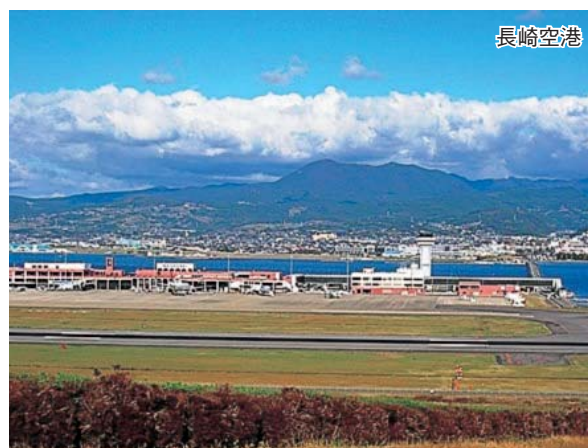
はじめに

大村市は、昭和17年に1町5村が合併して市政を施行しました。「大村千年の歴史」と称される大村は、中世には三城・玖島城を居城とし、江戸時代を経て明治維新に至るまで大村湾一帯を治めていた大村氏の城下町です。中でも、第18代「大村純忠」は、日本初のキリシタン大名として長崎を開港し、1582年に天正遣欧少年使節をローマに派遣するなど日本史に高くその名を残しています。

昭和の時代は、東洋一の第21海軍航空廠が置かれ、軍都として発展し、戦後は世界初の海上空港「長崎空港」の開港、高速自動車道長崎道の開通、さらに平成に入り、九州新幹線西九州ルート新大村駅（仮称）の設置が決定するなど、高速交通網に恵まれた県央拠点都市として「花と歴史と技術のまち」をキャッチフレーズに発展を続けています。

長崎県内で唯一人口が着実に増加している市であり、現在、9万2千人に達しています。

また、昭和27年に日本最初のモーターボートを開催し「競艇発祥の地」としても全国にその名を知られています。



長崎空港

大村の歴史と観光

【玖島城跡に広がる大村公園】



板敷櫓と花菖蒲

大村市民のシンボリックな公園として親しまれている大村公園は、市街地の南の海岸線に突き出たところにあります。ここは玖島城跡

を中心に広がる22.1haの総合公園です。天守閣等の城の建物は残っておりませんが、大手門から城を取り巻く形で、ほぼ当時のまま残っている石垣に往時の壮観さが偲ばれます。特に海側に復元された「板敷櫓」を支える石垣は、扇勾配の曲線がとても美しく、大村公園のシンボルともいえる観光スポットです。この城は、三方を海に囲まれた難攻不落の城で、城の周りの浅瀬には外敵に備えて「捨堀」があり、築城にあたっては肥後の城主「加藤清正公」の指導を受けたと言われています。

春になれば、城を取り囲む堀沿いや往時のまま残る「^{ふたえぼぼ}二重馬場」には桜が咲き誇り、中でも「オオムラザクラ」は、60～200枚の花弁の八重桜で国の天然記念物に指定されています。桜が散るとツツジ、花菖蒲、アジサイと夏まで花が咲き続け、市民の憩いの場となっています。



オオムラザクラ

そして、目の前には「琴の海」とも呼ばれるほど波静かな大村湾が広がり、大村公園を明るく開放的なイメージにしています。今年、放映されているNHK大河ドラマ「龍馬伝」の中では、坂本龍馬役で長崎出身の福山雅治

さんと勝海舟役の武田鉄矢さんが、伝馬船で咸臨丸（ハウステンボスの観光丸）に乗り込むシーンのロケが行われたのも、この公園近くの寺島の沖合いの大村湾でした。



NHK大河ドラマ「龍馬伝」大村湾ロケ風景

【武家屋敷に残る五色堀】

玖島城の築城に合わせて、五つの小路が設けられ、その小路に沿って武家屋敷が形成されました。この時代の建物はほとんど残っていませんが、通り沿いの石垣などにその面影が残っています。城に最も近く大手門に通じる「^{ほんこうじ}本小路」は大村家一族や藩の建物が並び、最上級の武士たちの屋敷が構えられていた大通りです。

現在は国道（34号線）に遮断され景観は変わってしまっていますが、城跡に向かってまっすぐ伸びている様が当時の登城の大通りであったことを知ることができます。

また、この本小路の途中には大村藩の藩校「^{ごこうかん}五教館」があり、この藩校への藩主の出入専用の門に使用された「五教館御成門（通称黒門）」は、大村市立大村小学校に残っており、年に一度、卒業式の日、開門され、その門から卒業生が巣立っていきます。

五教館は、幕末には武士以外にも門戸を開いたことで知られており、この藩校で学んだ幕末から明治初期にかけて大村藩出身の多くの人材が、政治、学問、芸術などあらゆる分野で、新しい日本の国づくりに活躍しています。



その中の一人「渡辺清」は、西郷隆盛、勝海舟、坂本龍馬らと親交があり、幕末の大政奉還に向けた「船中八策」を練り、「江戸城無血開城」に同席しました。

弟の「渡辺昇」^{のぼり}は、長崎で坂本龍馬と会い「薩長同盟」の必要性を説かれ、長州藩との交渉役として、親交のあった高杉晋作や桂小五郎を説得し「薩長同盟」の成功のため、大きな役割を果たしています。



上小路武家屋敷通り

本小路から山手に向かって、現在は住宅が立ち並んでいますが、「上小路」^{うわごうじ}「小姓小路」^{こしょうごうじ}「草場小路」^{くさばごうじ}「外浦小路」^{ほかうらごうじ}の通りがあり、通りの両側には重厚な石垣が風格を漂わせ、当時の雰囲気が偲べれます。

また、通りのいたるところに残る石垣にも、野面積みや石切積みなど様々な形式が見られますが、色とりどりの海石を漆喰で固めて作られた「五色塀」^{ごしきへい}は、海を背景にした大村独特のもので、「草場小路」やその他の小路に短い距離ですが見事な五色塀が残っています。



五色塀

この武家屋敷通りの中にある「旧楠本正隆屋敷」は、当時の武家屋敷の様式をよく残しており県指定文化財です。



旧楠本正隆屋敷



緑豊かな多良山系を背後にした山間に広がる野岳湖周辺には、新しい観光スポットが次々に誕生しています。この地域は昔から農業が盛んなところで、「フルーツの里ふくしげ」として、なし狩り、ぶどう狩りなどの観光農園が多くあります。

特にオープンから10年を経た、「おおむら夢ファーム・シュシュ」は、大村湾に浮かぶ長崎空港や市街地を一望できる場所にあり、敷地内には農産物直売所、レストラン、収穫体験施設などの施設を備え、県内外からたくさんの観光客が訪れています。

レストランでは、大村産の食材にこだわった料理や大村産の農産物を使ったジュース、アイスクリームなど、ここでしか味わえないものを提供しています。この取組みは、「全国地産地消コンクール農林水産大臣賞」「グリーンツーリズム大賞」などを受賞しました。また、団魂世代をターゲットにした「農業塾」を開き、塾生が育てた芋を原料にした焼酎販売や農業体験と併せた民泊を地域に広げるなど、地元特産品を活かしたグリーンツーリズムの拠点施設となっています。

また、「外浦小路」は海のすぐ近くの海岸沿いにあり、大村湾の対岸の西彼杵半島地域の武士を外浦衆と呼び住まわせていました。

大村藩の領土が大村湾一帯に広がり海を介して行き来があったことが分かります。

【フルーツの里ふくしげ】



城下町の文化を大切にする一方、大村には新しい取組みも生まれています。

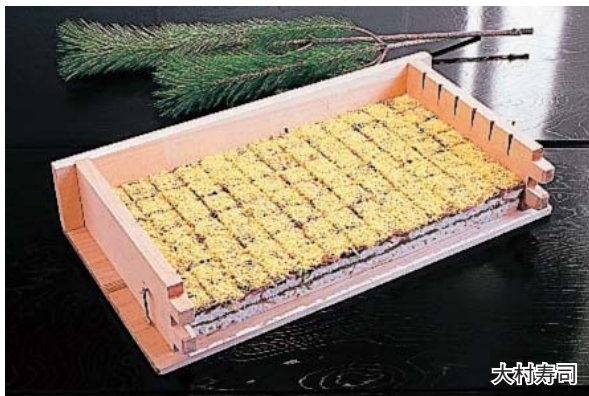


大村の代表的な物産

大村藩ゆかりの大村寿司と松原おこし

城下町大村には、江戸時代長崎から小倉を結んだ長崎街道が市内を通っており、この街道を使ってヒト・モノ・情報が行きかいました。特に外国から入った砂糖は、長崎街道を使って各地に運ばれたことから、別名「シュガーロード」とも呼ばれ、街道沿線には砂糖を使った食文化が根付いたと言われています。

大村にも、砂糖をふんだんに使った食文化として、「大村寿司」と「松原おこし」があります。



大村寿司

「大村寿司」は、全体的にたくさんの砂糖を使って甘味を強くすることが特徴、作り方は、寿司飯を四角い木製の寿司型（もろぶた）に広げ、この上にかんぴょう、シイタケ、季節の野菜（ごぼう、タケノコ、ふき等）、奈良漬などを全体に散らしてのせ、最後に錦糸卵をもれなくのせ寿司型のふたで強く押さえて作ります。それを約4センチ角に切って食べます。大村地方では、家庭のお祝いなどがあるときは、大村寿司をこしらえることが慣わしとなっています。

由来は、今から500年前に遡ります。

大村藩主「大村純伊（すみこれ）」は、島原の有馬勢との戦いに敗れ、唐津沖の玄海の孤島加々良（かから）島に落ちのび、不運な7年間のあと、大村領を奪回しました。

領民は旧藩主の帰りを大いに喜んで、将兵たちの労をねぎらうために食事を用意しました。

急なことで、食器などの用意もなかったため、とりあえず、もろぶた（木製長方形の浅い箱）に炊きたてのご飯をひろげ、その上に魚の切り身、野菜のみじん切りなどをのせて押さえたものを食前に供しました。

将兵たちはこれを脇差しで角切りにし、手づかみで食べたといわれ、これが大村寿司の起こりと伝えられています。

「松原おこし（へこはずし）」は、旧長崎街道筋に江戸時代から茶屋、宿場町として栄えた松原宿は鍛冶が盛んで、鎌、包丁、鍬などの特産品と共に、松原おこし（へこはずし）が有名です。米を蒸し乾燥させたものを煎り、自家製の水飴をまぶし、それに黒砂糖を入れて作ります。

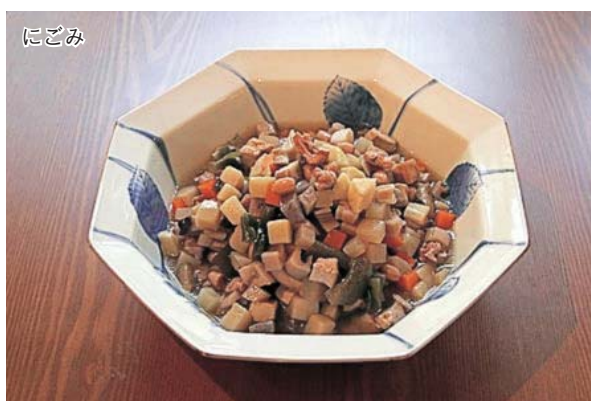


松原おこし

「おこし」の製法は中国の禅僧に伝授されて始まったと言われています。ある時、これ

を殿様に献上し、食べ終えた殿があまりの美味しさに兵児（禪）がはずれていることに気付かなかったことから、それ以来「へこはずし」と言うようになったと伝えられています。

その他にも、大村の郷土料理「にごみ」にも砂糖をたくさん使った食文化を見ることができます。



「にごみ」は、大村の様々な行事につきものの伝統料理です。その味は、各家庭の秘伝と言っていい程、微妙な違いがあり、代々伝えられたその家独特の味があります。

大きな鍋に細かく刻んだダイコン、ニンジン、ゴボウ、ハス、ジャガイモ、里芋、シイタケ、コンニャク、揚げ豆腐、かまぼこ、昆布、山の幸、海の幸等、いろいろな材料を合わせて、鶏の骨付き肉のだしで炊き上げる煮物です。

生の落花生を入れることにより独特の味がかもしだされます。

ことに砂糖で甘めの味付けが特徴です。

庶民の味「ゆでピーナッツ」

落花生の産地大村で、元々、農家が市場に出荷できない状態の未成熟品をどうにかできないものかとの考えから、殻ごと茹でてみた

のが始まりといわれています。

大村の赤土畑で獲れた新鮮な落花生を殻ごと大きな平釜に入れ、塩で味付けしながら茹でます。

おやつやビール・お酒のおつまみに最適で、大人から子供まで一度食べ始めたら止まらない大村人の必須食アイテムで大村地方では「ゆでピー」と呼ばれています。



その他にも、「女性の視点に立ったスイーツ」を再発見し、観光資源にしようと大村の観光PRなどに活躍しているフラワー大使のOG、市の女性職員などで結成した「大村フラワーメイツ・スイーツ組」の活動があります。一押し和菓子、洋菓子の紹介と、街歩きやド



すいーつパンフレット

ライブコースも一緒に載せたスイーツガイドを作成し、街中や山間にあるスイーツを市内観光に活かそうと取り組んでいます。

さいごに

「おもてなしの心あふれる観光地づくり」

大村市では観光客のおもてなしにも力を入れていきます。

市民ぐるみのおもてなしの取組みの一つとして、ボランティアガイドの養成があります。

「おおむら歴史観光ボランティアガイドの会」がその中心となって、市内外からの観光客の案内に活躍しています。今年、新たに取り組んだ「市内観光周遊バス」では、桜や花菖蒲の観光シーズンに大村公園と長崎空港を起点として、ボランティアガイドがたくさんの観光客を案内しました。



「市民が郷土の歴史や自然を誇りに感じる観光地づくり」

海・川・山など自然環境に恵まれた大村を、「故郷にしたいまち」として定住される方々が増えています。

このように外から見る大村の評価は高いと感じておりますので、市民の皆様にももう一度、自分たちの住む地域の魅力を再認識していただき、地域の歴史や文化などに誇りを感じていただきたいと思います。

大村市ではこれからも、市民と観光客が一体となって「住んでよし、訪れてよしのまちづくり」を進めてまいります。

